

■ 基調講演『ロータリー100年を迎えて』

R財団元トラスティー・RI元理事
千 玄 室
 (京都ロータリークラブ)

皆さん、おはようございます。今日は菅生RI会長代理ご夫妻又、ご来賓の方々、大勢の会員の方々、ご家族をお迎えして、神谷ガバナーご夫妻によりこの地区大会が盛大に開催されましたことを私も嬉しく、心強く存ずる次第であります。2日目となりまして、従来ならば会場のメンバーもだんだん少なくなっていくような状態がいつもございますが、今回は大勢の皆様方に居ただいて、嬉しく思います。ご協力ありがとうございます。これもやはり神谷ガバナーの真摯なご指導と又、ホストクラブの皆様方のご親切な、準備万端すべてについてお心遣いを頂きましたすばらしい思いやりのある暖かい内容のある大会だからこそ、皆様方も居心地よくおいでになるのであろうと思います。だんだん時間が食い込んでおりますので、私の話も最初は1時間頂いておりましたけれども、時間の許す限り少しお話を申したいと存じます。

実は昨日、伊豆の下田というところで、(アメリカのペリー提督が浦賀から下田にやってきました、いわゆる尊皇攘夷から徳川幕府が意を決しまして開港いたしましたその最初の港になりましたのが下田でございます)開港から150年というおめでたい日を迎え、昨日と今日の二日間、国際シンポジウムの催しがありました。その中でお招きを受け、「国際的な観点から」という題で是非お話をしたいということで昨日一日、朝から下田へ参りました。下田という街は小さな街でございますが、大きな国際的な躍動を持っているところであると感じました。そこで、市長さん(たまたま青年会議所のご出身)、多くのロータリアンの方々、また青年会議所の方々、一般の市民の方々がざっと300人ばかりいらっしゃり、その中で外国人留学生の方がおられました。挨拶をして聞いてみましたら、大阪や東京など遠いところから、それぞれ来ています。中にはロータリー財団からの奨学生もおられまし



たし、米山の奨学生もおられて、心強く思ったのです。

ご承知のように、下田は長崎の出島とは違って、出島はオランダ人に特別に管理されそこから外には一歩も出られなかったのですが、下田の街は1846年にペリーが来て、開港されてからアメリカの人達が自由に下田の街を歩け又、ハリスという初代の総領事が任命され国交が樹立されて滞りたしました玉泉寺や仙寺という寺も残っております。多くのアメリカ人達が自由自在に下田の街を歩き、言葉を越えて心から結び付けられる国際交流というものが、その街の中で活発に行われていたのです。驚いたことは、萩から吉田松陰が密かにアメリカへ渡航しようということの下田までやって来て、下田から自分で櫓を操り船に乗って、沖合いに停船しているアメリカの船に乗って密航し、アメリカへ行こうと企んだらしいのです。そして先に浦賀に来ておりました船にも接触し、乗ろうとしたんですが失敗をし、そして下田まで来たというお話なのです。吉田松陰が一人で櫓を漕いでアメリカの船のところまで行こうとしたのですけれども、何しろ櫓が下手なものですから同じところをぐるぐる回っておった。それを市民の人達はやきもきして見ておりました、ようやく船に着いたが乗船を拒否された。ということは、もう総領事館ができて、そしてアメリカとの国交ができたので、いまさら船に乗せると日本の出国を許されない人間でありますから密出国ということになる。だからそういうことでは、後で問題になったら困るということで拒否をされたという、そういう物語が下田の街に残っております。吉田松陰が渡航ができな

ったという一つの歴史的なことも初めて知りまして、私は歴史の流れというものの本当に不思議さというものをしみじみ感じたのです。そこで多少、ロータリーのことなどにも触れまして国際交流というものの大切さを話してきました。

私はいつも申しておりますように国際交流というのは言葉を越えて、そして慣習を越えて、すべての国々の人達が人間として接触し、交流することだと思います。日本から初めて大分県中津RCのメンバーの向笠広次さんという方がRI会長に就任されました時、「マン・カインド・イズ・ワン」「世界人類は一つである」というテーマを掲げられたのであります。私はこのターゲットが好きです。どこの国の人という区別、差別ではなくて、人間としてお互いに、接触する、交流する。小さな輪でも大きく広げていくという心持が人間にあれば差別、区別する必要はありません。先程ミャンマーの報告を伺い、又、ここでミャンマーの方々が本当に純朴な姿そのままで心から感謝を捧げられました。福井の各クラブがなされた学校建設、あるいは学校建設を通じてなされたミャンマーの街を離れたああいう村の人達と接触し交流された、難しい言葉ではなく、いわゆる人間同士の暖かい触れ合いをされたという現実、私はこれこそ本当にすばらしいロータリーの奉仕だと思いました。大きな奉仕ではなからうか、これこそがロータリーの真髄ではないでしょうか。ロータリアンが口々に「奉仕、奉仕」と言いますが、手をこまねいては何もならない。それもミャンマーへ行かれた方々が、ふと路上で托鉢をしている人達を見つけて、自分は帰国前であるからと持っていたお金を全部、托鉢に寄贈されたということが始まりだという。私も自分自身が僧侶で修養しておりました時に托鉢に出て、そしてなかなかお家の前まで行きましてもお布施を頂戴することはできないということが度々ございました。10軒、15軒回ってようやく2、3軒の中からご老婆が出てこられて「本当に少ないけれどもこれがお布施です」と頂いた時には、涙が出るほどありがたく思ったのでございます。私どもはそれを仏様にお供えて、それから私たちの日常の糧に使わせて頂くのですが、とにかく人間がなせること、先ほどもミャンマー

の校長先生がすばらしい功德をくださったという、その言葉の通りです。これは皆様方もお聞き頂いていると思えますけれども、禅宗が達磨大師によって興されて、そして中国、ちょうど唐の初期でございましたけれども、唐へ布教に行かれた時に、たまたま梁の時代でありました。武帝という皇帝がおられました。その皇帝は仏教の熱心な信者でございまして、自ら写経したり、仏を彫ったり、そしてお寺を建て僧侶を育成されたりしていた。いつも心の中でこれだけのことを自分がさせて頂いている、何かいつかはそれに対して功德があるかもしれないということを考えておられたところへ、達磨大師が参りました。「これはいい時に達磨大師が来られた。いっぺん自分がしてきた功德について聞いてみよう」と達磨大師に「自分はかくかく次第で、こういうことをしてきた。本当に心から仏教を信仰しているんだ」ということをおっしゃいました。ところが黙って聞いておりました達磨大師がたった一言「ならびに無功德」。「功德なし」。「あなたが自分でこうやった、ああやったというようなことを言ってしまったら、もうこれは功德じゃないのだ。功德というものは自分のためにするのじゃない。他の人達のためにするようにあなたは一生懸命、皇帝として自分の国の人達が幸せになるようにすることがあなたの務めではないか。これをああした、こうしたと言ってしまったらお終いだ。」とおっしゃったというお話が残っております。私達ロータリアンはやはりこの無功德の心構えで事にかかっていかなければいけないのじゃないか。自分の手を染めて、小さなことでもやっていく。昨年のマジアベ会長は「Lend a Hand」ということをおっしゃった。「皆の手を貸してくれ。いろいろなところへあなたの方の、その心の手を貸してくれ」という意味でございまして。ただ手を貸してくれじゃないのです。心の手を貸してくれ。それは非常に大切なことです。私は今、ロータリアン一人一人がその心の手、それを差し出すことによって、100年前を振り返ってポール・ハリスがなぜこのロータリーというものを作られたかということの原点に立ち返らなければならないのではないのか。100年経った今日、私達はロータリアンとしてこの100年を祝うべき席にいら

れるということは、ありがたい幸せなことではないでしょうか。今、この瞬間が私達が与えられたロータリアンとしてすばらしい誇りと、そして歴史の流れを感じず瞬間である。そういう気持ちを大切にすることによって、私達の小さなことでも人々を感激、感動させ、そしてそれに又、「それなら自分達もやろう。こういうことならやろう。」と、例えば先ほどのミャンマーに対し福井の各クラブが一緒になってなされたこと。1クラブじゃない。1クラブでは限度がある。皆がそれに協賛して福井県のロータリアンが学校を作られた。そしてミャンマーの小さな村の人達に未来の夢を与えられた。新世代に対する思いとか、そうしたものを私達は考えなければならぬのです。私達はこういうことを一つの教訓として、これから私達のできる限りのことをお互いに共に手を繋ぎあってやっていこうではありませんか。それをやることによって私達の奉仕というものが世界に大きく、見上げるばかりじゃなくて、いわゆる新しい世代に対してのロータリーに対する期待感というものを持ってもらえるのではなからうか。そういうコンティニューイティ（継続）というものを今、私達が持たなければ、このロータリーの行く末がどうなるのかと案ずるのであります。ポール・ハリスはロータリーをこしらえられた時に、濫り乱れた世相の中で本当に善意の心を持った人達が慈愛と寛容と忍耐、この三つを節にして、お互いに自分達のできることから世直しをしていこうという意味で始めたのです。今ちょうど世界中を見てまいりますと世直しをしなければならぬ。まあ、私達が手をこまねいている間に、先にこの福井県下も大変な風水害に遭われました。また先般は舞鶴や宮津やこの近辺がまた再び風水害に遭いました。更に未曾有の大地震、阪神に続いて中越大地震が起こった。やってくる寒さと、そして再び襲うかもしれない地震に対して恐怖心を持って、恐々として暮らしている方々がずいぶんいられる。そういう中で私達が単に手をこまねいて、そして同情心だけでそれを見守っているということは、許せないことです。私達自身がやはりそういう災害に遭った時に、どのような気持ちを持って接している人々が一番ありがたいかということ

を、ここで私どもは本当に知らなければいけないのではないかと。そういうことが善意を中心とした慈愛であり、忍耐であり、寛容であるのです。今、私どもはこのロータリーを通じて一人一人が職業奉仕、社会奉仕、そしてそれを通じて自分達の、ささやかであっても国際間に橋を渡して国際親善ということもやっている。そして、クラブに帰れば自分達のクラブの中でのいろいろなことに参画できるというクラブ奉仕がある。そういうシステムというものを私達ももっともっと活かしていく必要がある。この100年というちょうどいい日を迎えた時にこのことにつき考えていく必要もあるし、どうすれば実行できるかということを考えなければならぬ。幸い今年度出られた私どもの神谷ガバナーはそういうことに対し大変謙虚に、そしてまた顕著に、明確にいろんな点でご指導を頂いているのであります。心から私は大きな敬意を表しております。100年目のガバナーになられたということは大変なことでもあります。私はなりたいたくともなれない。100年目のガバナーというのは神谷ガバナーお一人なのです。どうぞ奥様と二人で、すばらしい100年目のガバナーとして足跡をお残しいただきたい。足跡ということよりも、本当に今、そのままやっつけらっしゃることが、私はロータリーの歴史に大きな1ページを飾っていくものと存じます。

私、3日前に用事で東上いたしました時に、偶然に名古屋から、私が青年会議所の会頭をやっている時に副会頭になってくれました友人が乗ってまいりました。いつも会いたいと願っているのですが、なかなかすれ違いで会えなかった。その人も名古屋南のロータリアン、チャーターメンバーです。もう50年のロータリー歴を持っている。口うるさい人ですけれども、真実性のある人です。それと一緒に、仙台にこれから行くと言う。まあ、そういうことで私は横浜で降りたのですが、それまでの1時間半ほど思い出話やいろんな話をしていながら、ロータリーの話が出てきた。その時に彼が「この頃のロータリーはつまらん」ということを言い出した。「どうもこの頃のロータリーは寄り合い所帯みたいになってしまった。昔のロータリー、50年前、名古屋のロータリークラブの元老

の人達から、おまえまだ若いけれども、ひとつ南のロータリーにチャーターメンバーとして入ってやれと言われた時に、飛び上るほどに歓喜の念であった。そして又、そんなロータリーに入れてもらえるということがありがたい、うれしいことだ。自分の立場を考えても、ロータリーに入れるとは思っていなかったのが、チャーターメンバーに入れてもらって、そしてロータリーで元老方からいろいろなことを教えてもらった。その中で一番私がロータリーに入って良かったと感じたのは何だかと思うと私に言います。「それは青年会議所と違ってロータリーというのは、年齢がバラバラだ、上は80歳、90歳の人もおられれば、下はまあ30歳代の始めからということで、なかなかその若い者にとっては最初はとっつきにくいだろうと思った。けども、いろんなことを先輩の元老方から教えてもらうというよりも、同じテーブルに座った時に、その元老の話聞いて、そこからなるほどこうだ、ああだと思うようなことを自分自らがそれを現実的に知るということ自体がロータリーの一番の良さであったのではなからうか」というようなことを、話していました。そして「なぜ、今頃のロータリーはつまらなくなってきたか、寄り合い所帯みたいになってきたか」と言いましたら、要するに「余りにもエクステンション（拡大）をし過ぎた。いわゆる量、量、量で質というものを忘れていた。クラブにおいても、クラブの催しの中に昔はよく勉強会というものがあつた、和気あいあいの運営のもとに、難しいことではなくて、話し合いがずいぶん行われておつたけれども、今はもうなにか格好だけでインフォーマルミーティングで通り一遍で過ごしてしまうので、お互いに話し合うという機会も少ない。知っている者同士だけが集まっていつも話し合っている格好になってしまった。又、地区のいろいろな催しなどに対しても、出て行く者は同じ者ばかりが行っている。行かない者はちっとも行かない。もう例会だけに出て行って、そそくさと帰ってってしまうというメンバーが増えているということは、やはり量の問題で、もっと質的な問題を考えなければいけないのではないかと。千さん一つそういう点についてもっと厳しくロータリアンに会って話をして

ほしいな」と、というようなことを言いまして、私も忸怩たる思いがしたのです。私自身も反省するのです。実際、そういうことを言われますと、なるほどな、エクステンションと、何か会員が増えればよい、クラブが増えればよいというようなことばかり。まあガバナーもお気の毒なのです。実際、研修に行って今年度は新しいクラブがいくつできるか目標を言いなさいとか、いろいろなことを頭ごなしに言われる。そう言われますと、やはりガバナーはエクステンションということに力を入れなければならない。また財団に対する貢献度からしても会員の皆様方には出費多大の折から申し訳ないけれども少しでもご芳志を頂きたいというようなことになってしまう。そういう問題を考えて見ますと根本的に一番の元凶は、会長代理の前で申し訳ないんですけれども、私はR Iの現在の組織機構というものであります。このR Iの組織機構というものを是正しなければならない時期にきているのではないかと思います。

時間がございませんので、未来のロータリーのために私自身これから命のある限りやっつけかねきゃならないと思う点を申しますと、まず第一番には拡大増強ということによって今の各ロータリークラブの内容というものが低下している。すべての面において機能が雑多になってしまっている。やればいいのかというところだけで終わっていくということはロータリーの本質から外れていっているのではなからうか。そこでやはり量よりも質。量が増えております限り質というものの内容を各クラブ会長、役員の皆様方がいろいろ考えていただいて、本来のロータリーのあり方というものを考えそこで毅然と立ち直って、そしてロータリアン自体がもっと誇りを持って自分自身の存在価値というものに対する認識を改めて頂くような方向性をしていかなければ駄目だということが一つ。第二番目にはポール・ハリスの思想の再認識。慈愛、そして忍耐、寛容のうえにあります、いわゆる善意の奉仕という真実性を、再認識して頂きたい。第三番目にはロータリーの行政改革のためにR Iの事務局ワン・ロータリーセンターの縮小化を私は提唱したいのです。今のワン・ロータリーセンターのR I機構というものは膨

れ上がってしまっている。私が理事をやっている時よりも菅生理事のおやりになったついでの間では、事務局が大変膨張化し、しかも会員が縮小化しているにもかかわらず無駄な経費が出ている。たとえば菅生会長代理が先程、R I 現況報告もここでやたら数字を並べても仕方がないとおっしゃいましたけれども、60ページのところにもちゃんと書いてございますが、460万ドルの赤字損失ということが出てきている。せっかく会員方から頂いた収入でございます。支出をなるべく縮小していくということが大切です。問題点はプログラムが多すぎるということなのです。そしてやたらと委員会が多すぎるということです。そういうものを縮小すれば460万ドルの赤字は直っていくであろう。それと共にいわゆる事務局のアメリカ主義的な事務制度というものをクリアライ（明確）にしなければならない。合理的といいますがアメリカの事務制度というものは個人個人、インディビジュアル（個人的）な中で自分の範囲がここだという。日本の制度は少し融通性を持たせて、「ここからここをちょっとやって」というようなことを言いますが、アメリカではここからここは自分、自分の立場には触れるなと一切触れさせない。お互いにそこに事務局の協力体制といいますが一体化していくということがそこにない。これはロータリーの将来の存続に大きな影響を与えるのではないかと。第四番目にはアメリカ主導性から各国ロータリーの独自性の確立ということ。たとえば公式用語といいますが、日本語も入っていますが、やはり英語が先に立っている。英語を話せないものは駄目だというような風潮がR I の中にあるのです。英語を話せるということは私どもには当然わかるのですけれども、というのは本部はアメリカであり、ロータリー自体の組織の要を英語圏の人達が握っている、だからこそ英語で全てをやらなければならないということはわかるけれども、しかし他の言語も公式用語として認定されている。堂々と日本語でも、フランス語でもそれが通じなければいけない組織にしなければいけないのではなからうか。国際性というものは私はそうだと思うのです。一カ国の言葉だけで国際性ということは言えない。やはり認定された言葉で縦横無尽に

理解し合うことによって、その組織の国際性というものがもっと確立されていくのではなからうか。さきほど菅生会長代理がおっしゃいました。100年も続く組織というのは本当に珍しい。各さまざまな職業、さまざまな理念を持った方々が集まって、そういう方がロータリーという一つの思想、哲学の下で、クラブの中のメンバーとして他のメンバーの方々と一緒になって奉仕の目的に向かっていく。このような組織というのは本当に珍しい。珍しいからこそ、これを存続させていかなければならない。残していくためには各国の自立性というものを確立していく。たとえば、NPOでありますけれどもロータリー財団から日本が財団組織を作ってもいいということで、国際ロータリー日本財団というものが昨年、誕生いたしました。本当にうれしいことではありますが、もう全部紐付きでございまして、会計検査からすべて厳重にやられて、少しでも余ったものがあつたら全部R I へ持っていかれる。積み立てなんていうことは全然認められないという財団でございますから、なんとかそういう点を是正していかなければならないのです。そして、また私も経験いたしましたし、皆様も経験されました、ちょうど菅生理事が担当の理事でもございましたこの5月に行われました国際大会。その国際大会を通じまして私はいろいろな辛酸を舐めたわけでございます。一番大きな問題は財務の問題でございました。大会は成功いたしました。しかしながら内容を見ますと、その国に委譲したにもかかわらず、すべて紐付きであれやこれやと、本当に小うるさいほどあちらこちらから強力なる指導性を持ってきて、そして頭ごなしにこれはこうやれというようなことを言って来た。今までの国際大会も全てそうであった。だからやりにくいよと聞いておりました。私も2、3の国際大会の副委員長を務めたこともありましたが、まあ自分が当面の責任者になってこれほどきびしいものとは思っていませんでした。これはちょっと内緒の話です。いろんな意味におきまして、法律的にも詳しい、その専門の菅生さんがおられたから、スムーズに問題点も解決できたと壇上からではございますが厚く御礼を申し上げます。国際大会におきましても一事が万

事そういうことであるということをごさきん方にちょっと申し上げておきたい。そうして大方の理解を頂戴したいと思います。そういうような問題、そしてまた国連とこれからロータリーは一緒になって人道的な奉仕、世界に対する平和というような問題、ポリオもお陰様で2005年をもちまして終了宣言ができるのではなからうか。しかしながら、まだまだいろいろな病が出てきております。日本が協力しているポリオに対するいろいろな資金繰りも西村二郎パストガバナー（財団のポリオ撲滅キャンペーン委員）もいらっしゃいますけれども、まだ1%の壁がどうしても破れない。もう少し皆様方にひと踏ん張りしていただきたい。国際的なポリオ撲滅に寄与することにつき日本の弱腰が見られますので、どうぞ、この点につきましても何分のご理解を

頂戴したいと存ずるのです。特に2650地区はそういう意味におきまして財団に対する寄与の力も大でございますので、益々ご協力、ご支援のほどお願い申し上げます。

私が今までお話しいたしましたとおり、ロータリーの未来というものを考え、なんとか改革しなければならない点は、私どもはどんどんR I に意見を具申し是正すべきところは是正していただき、私達も更に幅広い国際的な内容を持つ一人のロータリアンとして、いろいろ貢献していかなければいけないのではないかと存ずる次第であります。時間がまいりましたので、もう少し申したいこともございましたけれども、以上をもちまして私のお話を終わります。どうもありがとうございました。